

よつかいどう 市史編さんだより

創刊号

発行：四街道市 編集：四街道市教育委員会教育部社会教育課市史編さんグループ

〒284-0003 千葉県四街道市鹿渡2001-10 四街道市役所第二庁舎一階 電話043-424-8934 平成29年9月発行

ホームページでより詳しい資料を紹介しています⇒ [よつかいどう市史編さんだより](#) 検索
古文書・古写真等の調査も募集中です

検索

【創刊にあたって】

四街道市史編さん委員会委員長 武富 裕次

本市では、総合計画における施策「文化の創造と歴史の継承」を実現するため、市史編さん事業の方向性を示す「市史編さん基本方針」を平成二十九年二月に制定しました。そして、このたび基本方針の付帯事業に基づき、「よつかいどう市史編さんだより」を創刊することとなりました。

今日、市民アイデンティティが高まる中、私たちの「ふるさと四街道」への深い誇りと愛着を持つ「郷土愛の醸成」と未来へ向けた「まちづくり」を推進するため、新たな市史編さんが必要とされています。

私たちの市域は、今から約千三百年前の古代に制定された「大宝律令」において、「下総国千葉郡物部郷（旧千代田町域）・山梨郷（旧旭村域）」として編成され、中近世の時代を挟み、佐倉藩西洋式砲術演習地の流れを受け継いだ明治時代以降、「関東一の大砲射撃場」、「軍隊のまち」として発展しました。終戦後には文教都市、旧演習地農地開拓、団地開発を推し進め、急激な人口増加を辿りました。これら歴史的な大転換を迎えた時代を、後世に伝えるべく資料調査・収集・研究に努め、全貌を明らかにしていく必要があります。

今後は編さん作業における経過・成果を「市史編さんだより」で掲載していく予定です。この市史編さんだよりを通じ、郷土四街道の歴史や文化への理解をさらに深めていただくことができれば幸いです。

【創刊記念特集】

大坂夏の陣と四街道

真田信繁に挑んだ男

間宮新四郎盛定



一．はじめに

慶長二〇（一六一五）年の徳川家・豊臣家の大決戦「大坂夏の陣」において、豊臣勢名将「真田信繁（幸村）」に一戦を挑んだ四街道市山梨地区出生の徳川勢武将「間宮新四郎盛定（もりさだ）」について、ご紹介いたします。

二．豊臣秀吉の小田原征伐と天下統一

織田信長が明智光秀に討たれた「本能寺の変」の後、羽柴秀吉は関白・太政大臣へ就任、豊臣姓を賜り、織田政権後継者の地位を得ました。天正一八（一五九〇）年には関東の「小田原北条氏・千葉氏」を滅ぼし（小田原征伐）、「天下統一」を成し遂げます。関白秀吉より、三河・駿河から関東へ領土移封を命じられた家康は、間宮氏を始め、多くの小田原北条氏・千葉氏旧遺臣を自身の旗本・家臣として取り込みました。

三．佐々木氏支流間宮一族と四街道

隅立四ツ目結紋を家紋とする「間宮氏」は、鎌倉・室町時代に全国的勢力を持った守護大名「佐々木氏」の一族で、第五九代宇多天皇（在位八八七年〜八九七年）の孫「源雅信」から派生した武門「宇多源氏」の一派です。一族からは六角氏・京極氏・尼子氏・黒田氏・横山氏・大熊氏・大橋氏

など、数々の名門近江源氏が誕生しています。

間宮一族は戦国時代になると、相模国一带に勢力を広げた伊勢新九郎盛時（北条早雲）の家臣となり、小田原北条氏重臣として数々の戦功を上げ、関東にその武名を轟かせました。中でも、氏康・氏政・氏直三代に仕えた間宮康俊一門の「康信・綱信・信盛」が特に知られ、間宮三傑ともいわれています。小田原征伐では、間宮一族も大奮闘しましたが、秀吉軍の前に敗れ、徳川旗本に取り立てられました。

康俊を継ぐ間宮宗家の「新左衛門直元」は、本地域の鹿渡村二八一石・中野村・和田村・成山村など千葉郡・印旛郡内に一〇〇〇石の知行地を、直元の叔母「於久（おひさ）」は家康側室に、綱信嫡子の「庄五郎正重」は高津村（八千代市）に、正重弟の「十左衛門頼次（盛定父）」は山梨村（四街道市）に二〇〇石の知行地を得ました。

四・大坂の陣と間宮一族

慶長五（一六〇〇）年九月、秀吉五奉行の石田三成と争った「関ヶ原の戦い」においても、間宮一族は戦功を上げ、「大坂の陣」へと続きます。慶長一九（一六一四）年一月「冬の陣」では、宗家の間宮直元が赤備えの井伊直孝隊に加わり、井伊隊は信繁が築いたあの「真田丸」に最前線で攻戦しています。

そして翌二〇（一六一五）年の五月七日、「夏の陣」における最終決戦「天王寺・岡山の戦い」が始まりました。

明け方、徳川勢では江戸幕府二代將軍秀忠が岡山口方面に出陣。將軍直属の「大番頭」として高

木正次隊、阿部正次隊が従い、その先手に前田利常、本多忠純、黒田長政らに続き、藤堂高虎、井伊直孝、細川忠興、本多康俊らが進発。後備に水野忠清、土井利勝らが続きました。この時、間宮十左衛門家二代目で弱冠一九歳の若武者「間宮新四郎盛定」は、従兄弟の「間宮庄五郎正秀」と共に「大番」として高木隊に従い参戦。大御所家康は、天王寺口方面に出陣。先手に本多忠朝、真田信吉・信政（信之子・信繁甥）らが備え、道明寺近辺には伊達政宗らが出陣しました。そして茶臼山方面には、越前松平直隊が進みました。

正午過ぎに天王寺口付近で開戦。豊臣勢真田信繁隊が茶臼山から討って出て越前松平隊に突撃、そして家康本陣へ突き進みます。家康本陣が信繁隊・毛利勝永隊に追い詰められたところへ、高木・間宮隊らが救援へ駆けつけました。庄五郎正秀は「五月七日真田幸村が陣をうちて戦死す。年三十一……」（『寛政重修諸家譜』）とあるように、両軍大乱戦となり多数の戦死者を出しました。

やがて疲弊した信繁隊が撤退、信繁は越前松平隊の西尾仁左衛門に討取られ、豊臣勢は大坂城へ総退却、深夜には大坂城が全焼し陥落しました。翌八日には豊臣秀頼が自害し、豊臣家が滅亡。名実ともに、徳川の時代となりました。

「勇戦して鎗創をかうぶり、凱旋のちちいくほどなく死す……」（『寛政重修諸家譜』）
勇戦した盛定は、この戦いにおいて槍で負傷しながらも凱旋、程なく没しました。

五・間宮十左衛門家と山梨大隆寺

盛定亡き後、弟の「信繩（吉俊）」が十左衛門家

を継承。山梨地区内の「鷲棲山大隆寺」本堂裏には、約三五〇年前に建立された一族を弔う供養墓が今もひっそりと祀られています。

（文・市史編さんグループ事務局）

参照：日色義忠「続無縁仏となった旗本間宮氏の群像」『四街道市の文化財第15号』・平山優『真田信繁 幸村と呼ばれた男の真実』・『国史大系 徳川実記第二編』・他

【さかのぼり 四街道の歴史 第二回】

四街道町の誕生 昭和三〇（一九五五）年三月

この年には、

国外 ワルシャワ条約（5月）冷戦激化

国内 砂川闘争（9月）・自民党結成（11月）

原子力基本法（12月）

神武景気（高度経済成長）

県内 県民所得が戦前の水準に戻る（3月）

新京成電鉄開通（3月）

県独自の犬税新設（11月）

まずは、四街道町が誕生して六二年目になりますが、新聞を通して四街道の歴史をさかのぼり、当時の様子を見ていききたいと思います。

昭和三〇年の合併は、昭和二八（一九五三）年の町村合併促進法をうけて、現在の市町村の原形（佐倉市や八街市など）ができた「昭和の大合併」のもので、四街道町の合併は、当初から千葉市・佐倉市など周辺の市町村などとの合併が検討され、住民の考えも様々であり、旭村の馬渡地区は佐倉

【古文書が伝える四街道の歴史 第二回】

〳江戸時代の六方野〳

一. 「六方野」の開拓

四街道市の西北に「鹿放ヶ丘」（ろっぼうがおか）という地区があります。戦後この地の開拓者たちが命名した地名です。鹿放ヶ丘の西側に隣接する千葉市側には、同じ読みの方葉市稲毛区六方町（ろっぼうちょう）があります。

この両地域は古くから「六方野」と呼ばれた広大な原野の北部にあり、南は現在の市域めいわ団地・鷹の台団地から金親の手前まで、西は千葉市の宇那谷から犢橋の手前まで広がっていました。

六方野の開拓は江戸時代の寛文一二（一六七二）年の江戸の商人たちが幕府に願ったことから始まり、八〇〇町歩を超えるまぐさ場が開発され、長沼新田が誕生しました（千葉県文書館所蔵「長沼新田地図」）。そして現在の大日山（当時は権現山）の南方地域が長沼新田の新畑となり、東金御成街道の両側に長沼新田の集落が起立しました（現在の国道一六号線長沼交差点周辺）。

二. 「権現山」から大日山へ

権現山は宇那谷村の村域に含まれ、村の檀那寺である大聖寺の境外地として管理されました。権現山は、徳川家康が東金への鷹狩御成の途中に立ち寄り休憩を取った、との言い伝えがあります。

この権現山について、宇那谷村の古文書「延享三（一七四六）年村明細帳」（千葉県文書館所蔵中村家文書）が次のように伝えていきます。

「御公儀様御除地、湯殿山権現、八町歩、右寺（大聖寺）支配」、つまり年貢免除の地所で、本尊は出羽三山のひとつ湯殿山権現とされています。

また嘉永五（一八五二）年「書上帳」（同家文書）には「右者東照宮より御寄附二付、依之四箇年目御礼登城相勤申候」となっており、権現山は家康から寄付されたもので、四年ごとにお礼の江戸城登城を実施していました。ところで、明治三（一八七〇）年に宇那谷村が提出した「本末寺号其外明細帳」では「境外除地大日山壱ヶ所、反別拾貳町歩、同寺（大聖寺）持」となっており、権現山は大日山に変わっています。明治維新の神仏分離令により権現の神号が一時禁止されたこともあり、「大日山」に改称したものと思われる。

三. 六方野は鹿狩の舞台

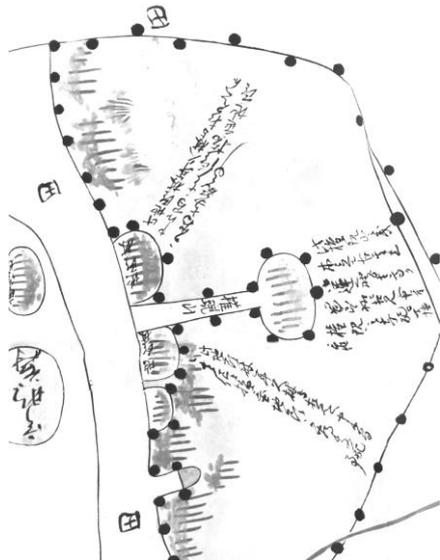
徳川将軍は四回の小金原（現在の松戸周辺）での御鹿狩を行っています。享保一〇（一七二五）年と翌一年に八代将軍吉宗が、寛政七（一七九五）年には一一代将軍家斉が行っています。そして最後の四回目は、嘉永二（一八四九）年三月一八日の一二代将軍家慶で、四街道市指定文化財の井岡家所蔵「嘉永二年小金原御鹿狩文書」二二点の古文書と大絵図二点が詳細に伝えています。

現在の千葉・埼玉・茨城の約二千か村から約五万人の勢子人足が、北は利根川、東は鹿島川・小名木川、南は江戸湾、西は江戸川のへりに設けられた四九か所の揃所に集められました。

四街道市域では物井村・和良比村・小名木村に揃所が設けられ、四街道市域一六か村から二六八

人の勢子人足が、さらに印旛沼南部や利根川下流の村々を合わせて、二百九か村から、何と約五千三百人の勢子人足が集まりました。当時の市域一六か村の人口は推定四千人ぐらいですが、その混雑ぶりが想像されます。そして御成前々日の早朝、小金原に向けて二泊三日野宿をしながら追い立てを開始しました。六方野は初日午前中の追い立て場になり、大日山はちようど昼食休憩の場所となりました。なお、この間、小金牧（中野牧・下の牧）の御狩場・追い立て場に生息していた野馬数千頭が六方野に囲い込まれました。

ところで最近整理した屏風裏張文書（四街道市所蔵）に、文化一一（一八一四）年に佐倉藩主が六方野で鹿狩をした記録があり、この頃まだ六方野に鹿がいたことが分かりました。翌日家臣たちに鹿肉が下賜されたことも記録されています。



寛文年間開発当時の「権現山」
千葉県文書館所蔵「長沼新田絵図」より
(許可番号 29-県-5)

（文・市史編さん協力員代表 大矢敏夫）

※市ホームページではさらに資料を充実掲載中